

12

日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会
ニュースレター

フィールドワーク2011報告

日時：2011年9月14日～16日

場所：南光台教会

参加者：30名

今号は、9月14～16日に行われた当委員会の宮城フィールドワークの報告特集です。この巻頭言では、初日に行われた東八幡教会 奥田知志牧師による「解題」の一部をご紹介します。

高市和久（市川八幡教会）

震災から十日あまり、牡鹿半島の付け根の蛤浜（はまぐりはま）という小さな集落を訪ねた。区長の亀山さんが「今は涙が尽きないかも知れませんが、いつかきっと笑える日が来ると思います」というようなことが書かれた絵手紙を見せてくれた。大分からの支援物資に入っていたものだ。亀山さんは「すべてを失って、わたし今、これで生きてるんです」と言った。わたし自身あれがあったら、これがあったらと思いつきながら生きているが、最終的に人間を生かすものは何なのかを問われた。

復興のメタノイア（悔い改め）ということを考えさせられる。震災直後は、福岡にも「九州から東北に元気を届けよう」といった看板が一斉に立ったが、むしろ地震ですべてを失った人から何を聞くのかが大事だ。震災以来、被災地の人々から多くのことを教えてもらっている。ほんとうに出会えば、視点を変えざるをえなくなる。1985年、労働者派遣法に反対して「みんなが雇い化する」と訴えたのは釜ヶ崎の労働者だった。23年後のリーマン・ショックから青年たちが続々と路上に出て来て、その意味がわたしにもわかった。支援する側に、低みから見直すという意味でのメタノイアが起こらなければいけない。イエス・キリストとの出会いは方向転換を迫る。何を高みに立ってものを言ってるんだ、川底に降りて来いと招かれる瞬間だ。例えば牧師の震災支援は教会のことを十分やった上で余裕があったら、と教会が言うのであれば、教会は何も変わっていないのだ。

人間ひとりひとりの生活や心の中には、大なり小なり穴のごときものが開いており、その穴から冷たいすきま風が吹き込んでくる。その穴を埋めることも大事だが、その穴から何が見えるかがもっと重要だ——そう浅野順一は言う。悲しみに寄り添うとは、第一義的にはともに悲しみとともに泣くことだろうが、人の心の中に開いた風穴から世界や自分を見直すということでもあるのではないか。福音、よい知らせとは、万事望み通りに運ぶことだと思っていたのか。この惨状を見て神に裏切られたと思うのはそういう安価な信仰の結果ではないのか。

ペテロは「イエスなど知らない」と言う（マルコ14:53以下）。それは保身のためというよりは、イエスに対する失望ではなかったか。逮捕されておめおめと処刑されるようなイエスではない、必ず奇跡を起こして切り抜けるに違いないと思っていたのに、目の前にいるのは黙りこくって何の反論もできない弱々しい男だ。「わたしの知っているイエスはあんなイエスじゃなかった、あんなやつは知らない」というつますきではなかったか。しかしそのつますきがイエスとの真の出会いとなり、使徒とされていく。つますきなき信仰、十字架なき信仰は自分の願いの投影に終わる。逆に震災につますき、神に裏切られたと感じるところから福音への回心が始まるのだろう。

以上は講演のごく一部ですが、震災というでき事の信仰的な意味を深く問う内容でした。あなたは、あなたの教会は、この震災を通してどう変わりましたか？



●石巻、女川、志津川訪問

小野祐基（福岡有田教会）

フィールドワーク2日目では、牡鹿半島にある蛤浜と南三陸町志津川を訪問してきました。ここではその報告をさせていただきます。

まず石巻市内に行きました。仙台市内はほぼ元通りの状態に近づきつつありました。町並みも所々に工事をしている道路、家や学校があるぐらいです。けれども、沿岸に近づくにつれて、窓越しの光景が変わってくることに気付きました。松の木が赤茶色に変色し、枯れていました。それは津波が町を襲った痕跡でした。建物の柱だけしか残っていない家もありました。家財道具が散乱している家もありました。共に被災をしていますが、町のほとんどが崩壊している等、沿岸部は壊滅的な被害を受けていました。工場地帯も壊滅的な被害を受け、未だに機能が停止したままの状態です。

海産加工工場へ足を運びました。私たちが行った工場では、練り物をペースト状にする作業が行われていたようですが、工場内は何が行われていたかも分からないほど、機材が散乱していました。当事この場所で働いていた人達は、津波から逃げ切ることが出来たのだろうか。家族、子供達は怎么样了のだろうか。3月11日から半年後が経っていたとはいえ、未だ残る震災当初の光景を目の当たりにして、私の心の中は混沌とした思いになりました。震災によって一人一人の人生が180度変えさせられてしまったのですから。

次に牡鹿半島にある蛤浜(はまぐりはま)へ行きました。蛤浜はリアス式海岸の入江にある小さな集落でした。私たちはその村長にあたる方のお話を聞きました。

蛤浜には10世帯の家があり、そこに住む漁師の方々は、牡蠣の養殖を生活の中心にしてきたそうです。しかし、そこに津波がやってきて、家や船などを海に流されてしまったために、生活を続けるためのすべてを失ってしまったというのです。海と共に生きることによって生活を支えてきた人々が、逆に海によって生活のすべてが崩壊させられる。これほど大きな悲しみはないと思います。今までは漁の収穫を工場に運び、そこで加工をする形で得ていたそうですが、その加工する工場も被災したために、機能しなくなってしまったそうです。あの大きな地震、津波によって「積み重ねられてきた苦労が一瞬にして失われたのです。」そう村長さんは話して下さいました。現在は奥田牧師が活動されているグループからの支援を受けながら、牡蠣の養殖が再開されています。

外から来たよそ者であるにも関わらず、村長さん御夫妻は手厚く歓迎して下さいました。「せっか

く来て下さったのだから。」と、嬉しそうに私たちに作りたてのおにぎりを出して下さいました。おにぎりはとても美味しく、優しい味でした。奥田牧師が初日の講演で、語られた、ある方の一言を思い出しました。それは「三ヶ月間、ずっともらいもので食べているっていうのは、ありがたかったけれども、これって辛いよ。」という言葉だ。もらうだけの生活は、支援される側にとっては嬉しい反面、それはどこか苦しみを伴っていたのかもしれないと、自分がおにぎりを受け取ってみて、初めて感じました。

次に私たちは南三陸町津志川を訪問しました。目的地に到着するまでに幾度となく地割れした道を通りました。地震の凄まじさを知りました。また、崩壊した建物や道路、積み上げられた瓦礫や、それを撤去する人々の姿も目の当たりにしました。瓦礫の山を近くで見ると、そのほとんどが家財、あるいは機材なのです。折れた木の柱、自動車、畳、家の壁面部分等、ほとんどは日常生活で見かけるものばかりでした。瓦礫と化した山は、生活の思い出、人が生きた命の証しだと思いました。

到着後はバプテスト同盟の藤岡壮一さん(錦織バプテスト教会 伝道師)の案内で、仮設住宅を回りました。「仮設住宅といっても様々です。」そう藤岡さんは話して下さいました。分配された予算を半分しか使わず、残りを懐に入れてしまう業者もいたようです。一方で、予算を超えて良心で資金を投じた業者もいたようです。これが原因で格差が生じてしまったようです。建てる業者も被災して仕事を失っているのです。就労という複雑な問題が絡んでいることを知りました。

藤岡さんは避難所で調理を担当している方と関わり、豆腐や油揚げ、玉子など東北の人たちが日常的に使う材料をもって、仮設住宅に配給している。私たちもそのお手伝いをさせていただきました。グループに分かれ、一軒一軒家を訪ねました。このやり方はホームレス支援の働きそのものでした。ある家は留守でした。すると隣に住んでいる方がやってきて「預かってくよ。ちゃんと渡すから！いつもありがとう。」と声をかけて下さいました。ある家には小学生の男の子が一人で留守番をしていました。一つ一つの家に家庭があること、お隣同士、共に助け合いながら生活されていることに気付きました。

今回のフィールドワークのテーマは『泣くものと共に泣く』でした。被災していない私が、短期間しか訪れていない私が、被災された方々の人生やその悲しみを共有することなど、できません。もちろんそれには長期にわたって被災地の方々と関わり、一緒に歩む「伴走者」が必要になってく

るのだと思います。

ホームレス支援も例外ではありません。特に仮設住宅では「孤独死」が心配されています。避難所から仮設住宅へ移ったことで、関係性が途切れてしまい、近隣に住む方々との交流がなくなり、結果的に住宅に閉じこもってしまうことで起きる懸念です。ホームレス支援の場でも同じような問題を抱えています。ホームレスの方々もさまざまな事情によって関係、人生が崩壊し、路上生活を余儀なくされています。たとえ生活保護を受けて、アパート生活に入ったとしても、孤独死という問題から切り離されたわけではありません。誰かがその方の歩みに寄り添っていく必要があると思うのです。ですから、今回被災地で起こっている事は、困窮の問題と切り離せないものだと思います。

3月11日からメディアを通して現状を理解しようとしていた私は、いつしか、何か自分も物理的な支援をしなくては、という思いだけが先走っていたように思います。けれど支援の現場に立ったことで、全国の諸教会から送られている支援が、確かに形となって、人々の生活の支えになっていることを知りました。一方で蛤浜でお会いした村長さん御夫妻が握ってくださったおにぎりの味と温かい言葉、南三陸町で暮らす人々に自分が支えられていることを感じました。被災地の方々も、何か役に立てる事をしたいと、切望していたことに気付かされました。

被災地で生活する方々が発している声を聴き、連帯していくことが必要であると思われました。何気ない話しの中から出てくる喜び、悲しみを一緒に共有していく。それがいつしか、『共に泣く』ということに、福音を共に分かち合うことに繋がっていったらと思います。復興支援の歩みは長期化することが予想されています。私も被災地で生活される方々を覚えながら、被災地復興に向けた支援に加わっていきたいと思います。

●取り組みの報告と聖書研究

田隈教会 田中伊策

三日目、「取り組みの報告と聖書研究」という題で四人の方々のお話を伺いました。

南光台キリスト教会(仙台)の井形英絵牧師は現地で震災を経験され、その日から避難所として教会を地域に開放し、地域の方々を支援する働きをしてこられました。同じ揺れを感じ、同じ被害を受けた方々との「共に生きる」関わり、また多くの亡くなられた方を「弔う」働きについてのお話から、教会がその地にある意味について考えさせられました。それも、教会の日常の関わりについて考えさせられました。日常の関わりの積み重ねの上にこそ、震災の関わりが生きて、意味を持つからです。



井形英絵さんの報告を聞く



斎藤弘司さん

大富教会の斎藤弘司牧師は、この4月に西南学院神学部を卒業されて被災地の教会に赴任されました。「被災していない私に何が出来るか」という問いを抱えながらも「被災していないからこそ出来る事・関わり・支援がある」と思い赴任されました。教会は被災後すぐからボラ

ンティアチームの宿泊等などの働きが始まっており、後方支援を教会の支援の大切な柱の一つと位置付けておられました。さらに震災後、地域の子どもの保護者からのSOSを受けて、かつて行っていた共同保育「光の子クラブ」を再開されています。悩みを語る、SOSを出せるという事柄もまた、教会がこれまで積み重ねてきた地域への関わりによるものだろうと思います。

震災前からホームレス支援に携わっていた立岡学さん(特定非営利活動法人「ワンファミリー仙台 理事長」)は、震災翌日から炊き出しを始め、役所と連携し、避難所・福祉施設・病院等への支援物資の配送を行われました。更に復興段階での孤独死・自殺・社会的な孤立を防



立岡学さん

ぐために、被災者との継続的な関わりケアをする働きを立ち上げられました。被災者を雇用する事で、被災者が支援されるだけでなく支援をする側となる、被災者の思いを理解する支援者



を育てる、震災後の働き場の厳しい状況の中で新しい雇用環境を作る、という新しい取り組みです。しかし、仮設毎に問題が違い、区毎に思惑が違う中、そして入居者のプライベートなどの事もあり新しい絆づくりの課題も伺いました。「新しい絆づくり」のためには被災者との絆だけではなく、市町村や行政、関係機関との絆も作ってゆく事が必要なのだと思います。



藤岡荘一さん

日本バプテスト同盟錦織バプテスト教会の伝道師藤岡荘一先生は3月18日から南三陸町から気仙沼にかけての避難所への食材支援、並行して仮設住宅への支援を行ってこられました(フィールドワーク二日目には参加者も藤岡先生と共に仮設住宅の方々に卵や油揚げを届けました)。被災された方は自衛隊が入る前のカ

メラが写せないような状況、悲しみを見ている。その被災された方々が共有しているものの大きさ、その被災者と支援者の間にある隔たりの大きさを知って、「何もできない」と思い、被災者の声を聞き必要と言われた物を届けられました。決して理解することの出来ない悲しみ、同じ思いになれない他者、として、しかし傍らにいて被災者の声を聴こうとされているようでした。

お一人お一人のお話を聞きながら、イエスが「汚れた者」「罪人」と呼ばれ者に触れ「汚れ」や「罪」を一緒に引き受け、隔たりを越えて生きた清い関係を作られた(マル1:41,7:33)姿を思いました。被災者と本気で向き合い、本当に関わろうとする時、自らも否応なく揺り動かされるのだと思いました。心も身体も揺り動かされた方々の傍らに立つ時、自分も揺り動かされ、痛みを受ける。相手の痛みと自分の痛みは決して同じではないけれど、一緒に痛み、揺り動かされる中で、生きた関係が生まれ、生きる力が生まれてゆくように思いました。

●フィールドワークに参加して

舟塚結花(恵泉教会)

原発の被害に苦しむ福島の人を思い、被災地の方々のことを祈りながら、何も出来ずにあの東日本大震災から半年が過ぎた。そんな時にこのフィールドワークの募集が教会の週報に載った。行ってきたい…でもやっぱり無理だという理由が次から次へと頭に浮かんでくる。何がしたいのか、何が出来るのかわからないけれど、そこには多くの辛い思いをされている方々がおられる…だから思い切って、今与えられた機会に身をゆだねてみよう…そんな思いで参加させていただいた。

80センチもの地盤沈下により、海は陸と非常に近く、海水はすぐにでも地上に流れ込む、そんな状況の海岸線の復興は個人ではどうしようもない状況である。手つかずのままの水産工場は、壊れた機械の山と鼻を突く匂いがする。たくさんのがれきの山と壊れた鉄筋の建物を脇に海岸線を車で走ると、手書きの「蛤浜」「避難所」の文字。すでに多くの方が仮設住宅に移られたが、その場所には山から水が引かれ、手作りのお風呂、ハエ取り紙が天井からぶら下がり、屋号ごとの当番表があり、この半年の生活を垣間見ることができた。ご自分のお宅は無事であったのにこの避難所で共に生活を続けた蛤浜市長。船の調達、放射能の問題などあるものの、漁業の再開に向けて支援者と共に活動を始めている。「ここは高台でしょう」と思われるような場所で20メートルもの津波に襲われ、今もそのお体は見つけることができない女性のご家族は、現地の牧師や支援者の関わりからようやく前を向いて歩いて行こうとされている。仮設に暮らす人々は、私が頑張らないといけない、私よりもっと辛い人がいる、だから泣いてはいられない…そんな思いで自分の悲しみにふたをしているという。仮設住宅に移られた方々の雇用問題への取り組み、声かけ、見守りの活動も始まっている。

今回の旅で、被災地の様子に加え、大変な緊張の中、心を砕いて働いておられる、現地の牧師を始め、支援者の方々の声を聞き、その活動を知ることができた。多くのものを失った被災者の方々のことはもちろん、その方々に寄り添っておられる人たちのためにも祈らねばならないと強く思われた。この悲しみのただ中にイエス・キリストがおられ、そして共に立ちあがろうとして下さっていることが感じられてとても胸が熱くなった。この旅で出会わせていただいた一人一人の顔を思い浮かべながら、皆さんの心の癒しと平安が、そして救いが、神様によってもたらされることを信じてこれからも祈っていきたいと思う。



フィールドワーク参加者(南光台教会前)